



6.「森の家」の一角にある小林さんのアトリエ。7.どの部屋も小林さんの作品や、森で拾ってきた枝などを使って装飾。夫のパオロさんが改修を手掛けた物件に残されていた家具などをアップサイクルしたもの。8.森に自生しているエディブルフラワー。9.洋ナシ、ヘーゼルナッツなど、おやつも庭で採れるものを。

「7歳の次女も、ヘビが入れそうなすき間に鳥の巣を見つけた時狙われないか心配するなど、こどもたちの感覚が日に日に研ぎ澄ま



されていくようです」
ポローニャ郊外の学校では週3日は昼で終わり、午後はホームスクーリングの時間。人との接触が厳しく制限されている時節、こどもたちに家で何をさせるか、親に創造性が求められる。しかし、森での暮らしは、親が何かを教えようと思わなくても、こどもたちが自分から植物や虫、ペットの犬やロバなどと触れあううちに何かを学

『今』を感じようとすると、自然に五感を使う

会いの中に、どういう教えがあるのかと考えました」と明るく語る。「森の家」は1800年代半ばに建てられたもので、家の一部に地元の人々が住んでいたこともあるようだが、50年以上誰も住んでいなかったそうだ。そのため、森も建物も荒れ果てていたが、そこに惚れ込んだのが、代々建築が家業のパオロさん。パオロさん自身も歴史的建造物の修復などを手がける建築家だ。購入後1年かけて、住めるように今でも少しずつ工事が続いている。

「森の家」での暮らしはもちろ



1.「森の家」のキッチン。小林さんのワイヤーアートと森で摘んできた植物でおしゃれな空間に。2.ペットのロバが家の入口まで遊びにくることも。

ん、小林さんにもさまざまなパワーを与えてくれるという。「ポローニャも街並みは美しいですが、イタリアの中でもスモッグが多い場所なのです。でも森は空気が澄んでいて、朝日を直接浴びたり、朝露に濡れた木々や草花に触れたりするだけでも、財産と思えます」

こどもたちの感覚が
研ぎ澄まされてくる



美しい空気と大地に密着した生活を始めてから、自身よりもこどもたちの変化が大きいと感じているそうだ。3歳の三女のたえちゃん、季節によって太陽の方向が変わることを教えなくても感じ取り「夕陽はあっち（に沈む）」と話して、小林さんを驚かせている。

3.生活のリズムを保つため、やることのスケジュールを黒板に書き込むゆまちゃんとみうちゃん。タスクとお手伝いはポイント制にした。4.庭で摘んだ野草やハーブを挟んで作るフレッシュパスタ。たえちゃんもお手伝い。5.できたパスタをスープで茹でる。見た目から美味しそう。



び、生きる力を身につけている。学校から帰ってくると靴も靴下も脱ぎ捨て、冬でも裸足で動き回っているそう。大地から直接何かを感じ取っているのかもしれない。

「家の中でも、お菓子やパスタと一緒に作ったり、こどもたちにも役割を与えています。10歳の長女は最近、中国の料理研究家のビデオブローガーにはまって、料理を始めています。オイルなどをそこら中にこぼしています。面白そうにやっているのでも好きにやらせています。ネットやテレビなどを見たいと言った時は、何がよかったのかを書かせるなど、親としてもひと工夫しています。こどもから私たち親が学ばせてもらうことの方が多くですね」

小林さんのように広い森に住まなくても、全身で癒される方法はあるのだろうか？

「とにかく外に出て、自然に触れることですね。都会にも空はあ



るし、鳥も飛んでいます。感覚をオープンにして外の景色を眺めてみると、今まで見えなかったいろいろなものが見えてきます。そのなかに、自分だけの癒しを見つけることができるかもしれません」
世界中でさまざまなことが変わった昨年。今もなお、先のことの不透明で不安になることもある。小林さんはそんな時代でも、自然と共生する大切さやこどもたちの成長など、気づきが多かったことでむしろありがたかったと語る。

「森の家」では、分からない先のことを思い悩むより、『今』を感じて生きることが大事だと気づけました。移り変わる空模様、木々の芽吹き具合、季節折々の草花の香りなど、『今』を感じようとする自然と五感を使っている。すると小さなことにもワクワクして、それを身近な人とシェアすることで、より豊かに生きられると思うのです」